

【 聖枝祭のアポリティキオン 第1調 】

ハリスト スか みよ 、 なんぢは おのれのくるしみ  
 神 爾 己 苦  
 の さ き に い っ ぱ ん の ふ く か つ を し ん ぜ し め て 、  
 前 一 般 復 活 信  
 ラザリを しよ り お こ し た ま え り 。 ゆ え に わ  
 死 起 給 故 我  
 れ ら も ど う じ の ご と く し ょ う り の し る  
 等 童 児 如 勝 利 徽  
 し を と り て 、 な ん ぢ し の し ょ う り し ゃ  
 號 取 爾 死 勝 利 者  
 に よ ぶ 、 い と た か き に オ サ ン ナ 、 し ゅ の  
 呼 、 至 高 主  
 な に よ り て き た る も の は あ が め ほ め ら る 。  
 名 因 來 者 崇 讚

【 讃詞 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 す 、  
 ハリストス わ が か み よ 、 わ れ ら は せん を も っ て な  
 我 神 我 等 洗 以 爾  
 なんぢと と も に ほ う む ら れ て 、 なんぢの ふ く か  
 借 葬 爾 復 活

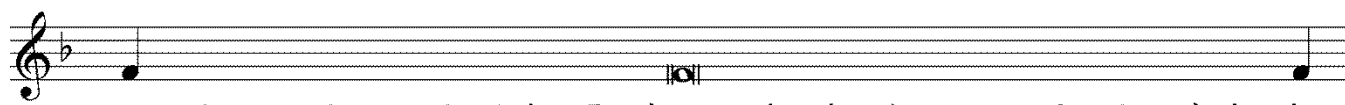
つによりてふしのいのちをえ得て、か  
 由 不 死 生 命 得 歌  
 しょうしてよぶ、いとたかきにオサア  
 頌 呼 至 高  
 ナ、しゅのなによりてきたるものはあがめほ  
 主 名 由 来 者 崇 讚  
 めらる。

【 聖枝祭のコンダック 第6調 】

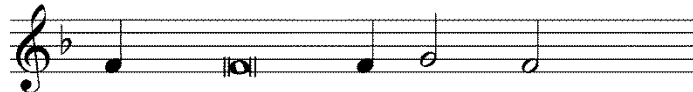
いまでもいつもよよに、アミン。  
 今 何時 世 世  
 てんにはほうざに、ちにはわかきうさぎ  
 天 寶 座 地 小 驢  
 うまにのせらるるハリストスカみよ、なんぢは  
 乗 神 爾  
 しょてんしのさんび、しよしのかしょうをうけたま  
 諸 天 使 讚 美 諸 子 歌 頌 受 給  
 えり。かれらなんぢによべり、アダムを  
 彼 等 爾 呼  
 よびおこさんためにきたるしゅよ、なんぢ  
 喚 起 爲 来 主 爾  
 はあがめほめらる。

【 聖三の歌 】

代禱) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>けいけん</sup>敬虔なる<sup>もの</sup>者を<sup>すく</sup>救い、<sup>およ</sup>及び<sup>われら</sup>我等に<sup>き</sup>聆き<sup>たま</sup>給え、



しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ  
主 敬 虔 者 救 及 我



らにききたまえ。  
等 聆 給

代禱) <sup>よよ</sup>世世に、



ア ミ ン。



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖 神 聖 勇 毅 聖



じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常 生 者 我 等 憐



よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖 神 聖 勇 毅 聖



なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常 生 者 我 等 憐



めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖 神 聖 勇 毅



せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖 常 生 者 我 等 憐



れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何時 世 世

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。  
 憐

【 提綱 (プロキメン) 】

代禱<sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) プロキメン、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、主は神なり、我等を照せり、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめらる、  
 主 名 依 来 者 崇 讃

しゅはかみなり、われらをてらせり。  
 主 神 我 等 照

誦經) 主を讃榮せよ、蓋彼は仁慈にして、其憐は世世にあればなり、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめらる、  
 主 名 依 来 者 崇 讃

しゅはかみなり、われらをてらせり。  
 主 神 我 等 照

誦經) 主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 。  
 主 神 我 等 照

【 使徒経 (アポストロス) 247 端 フィリッピ書 4 章 4~9 節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦経) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが <sup>じん たつ</sup> フィリッピ人に <sup>こうしょ よみ</sup> 達する後書の讀、

代禱) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦経) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>つね</sup> 恒に <sup>しゅ あ</sup> 主に在りて <sup>よろこ</sup> 喜べ、<sup>またい</sup> 又 <sup>よろこ</sup> 言う喜べ。<sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>おんじゆう</sup> の <sup>しゅうじん</sup> 溫柔は <sup>し</sup> 衆人に知らるべし。

<sup>しゅ</sup> 主は <sup>ちか</sup> 近し。<sup>なにごと</sup> 何事をも <sup>おもんばか</sup> 慮る <sup>なか</sup> 勿れ、<sup>すなわち</sup> 乃 <sup>およそ</sup> 凡の事に於て、<sup>こと</sup> 祈禱、<sup>おい</sup> 祈願、<sup>きとう</sup> 且 <sup>きがん</sup> 感謝を以

て、<sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>もと</sup> の <sup>ところ</sup> 求むる <sup>かみ</sup> 所を <sup>つ</sup> 神に <sup>しか</sup> 告げよ、<sup>かみ</sup> 然らば <sup>へいあん</sup> 神の <sup>およそ</sup> 平安、<sup>ちしき</sup> 凡の <sup>こ</sup> 知識に <sup>もの</sup> 超ゆる者は、<sup>ハ</sup> ハリ

ストスイスに於て、<sup>おい</sup> 爾等 <sup>なんぢら</sup> の <sup>こころ</sup> 心と <sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>おもい</sup> の <sup>まも</sup> 念とを <sup>これ</sup> 守らん。之を <sup>きわ</sup> 究むるに、<sup>わ</sup> 我が <sup>けいてい</sup> 兄弟

よ、<sup>およ</sup> 凡 <sup>まこと</sup> そ <sup>およ</sup> 眞なる <sup>とうと</sup> こと、<sup>およ</sup> 凡 <sup>ぎ</sup> そ <sup>およ</sup> 尊き <sup>いさぎよ</sup> こと、<sup>およ</sup> 凡 <sup>あい</sup> そ <sup>あ</sup> 愛す

べきこと、<sup>およ</sup> 凡 <sup>しょう</sup> そ <sup>い</sup> 稱すべき <sup>とく</sup> こと、<sup>い</sup> 如何なる <sup>ほまれ</sup> 徳、<sup>なんぢら</sup> 如何なる <sup>おも</sup> 譽も、<sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>われ</sup> 之を <sup>わ</sup> 念え。爾等 <sup>わ</sup> が <sup>わ</sup> 我

に <sup>まな</sup> 學びし <sup>ところ</sup> 所、<sup>う</sup> 受けし <sup>ところ</sup> 所、<sup>き</sup> 聞きし <sup>ところ</sup> 所、<sup>み</sup> 見し <sup>ところ</sup> 所は、<sup>これ</sup> 之を <sup>おこな</sup> 行え、<sup>しか</sup> 然らば <sup>へいあん</sup> 平安の <sup>かみ</sup> 神は <sup>なんぢ</sup> 爾

ら <sup>とも</sup> 等と <sup>お</sup> 偕に <sup>ら</sup> 居らん。

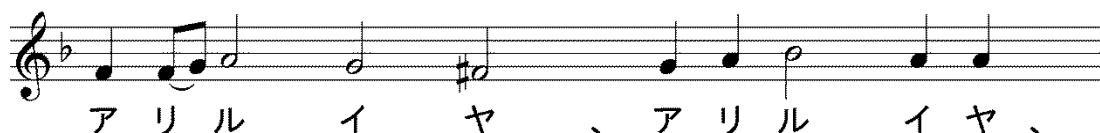
\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであろう。最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。あなたがたが、わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 聖枝祭主日 第1調 】

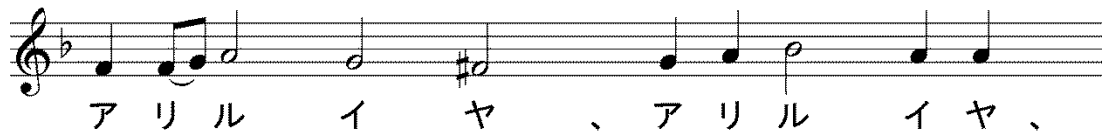
代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、



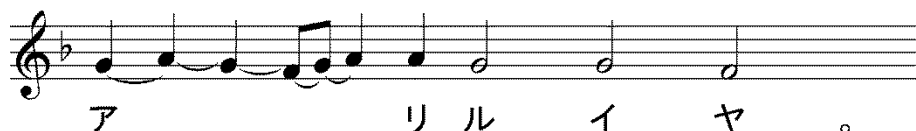
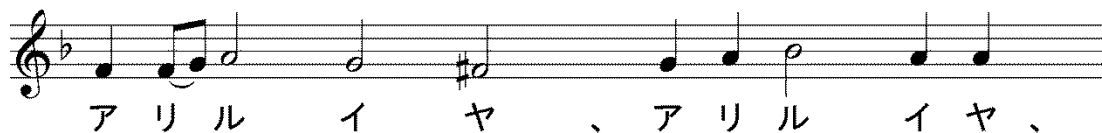
ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



誦經) <sup>あらた</sup>新 <sup>うた</sup>なる <sup>しゅ</sup>歌 <sup>うた</sup>を <sup>けだしかれ</sup>主に <sup>きせき</sup>歌え、 <sup>おこな</sup>蓋 <sup>おこな</sup>彼は <sup>おこな</sup>奇跡 <sup>おこな</sup>を行 <sup>おこな</sup>えり、



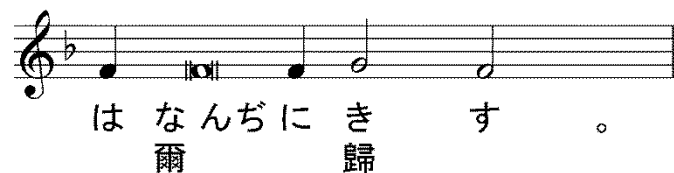
誦經) <sup>およ</sup>凡 <sup>ち</sup>そ <sup>はて</sup>地 <sup>わ</sup>の <sup>かみ</sup>極 <sup>すくい</sup>は <sup>み</sup>我が <sup>み</sup>神 <sup>み</sup>の <sup>み</sup>救 <sup>み</sup>を見 <sup>み</sup>たり、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書 41 端 12 章 1~18 節 】

代禱) <sup>えいち</sup>睿 <sup>えいち</sup>智、

誦經) <sup>でん</sup>イオ <sup>せいふくいんけい</sup>アン <sup>よみ</sup>傳 <sup>よみ</sup>の <sup>よみ</sup>聖 <sup>よみ</sup>福 <sup>よみ</sup>音 <sup>よみ</sup>經 <sup>よみ</sup>の <sup>よみ</sup>讀、



代禱) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて <sup>き</sup>聽 <sup>き</sup>く <sup>き</sup>べし、

誦經) <sup>か</sup>彼の <sup>とき</sup>時、<sup>パスハ</sup>逾越 <sup>まえむいか</sup>節 <sup>きた</sup>の前 <sup>すなわち</sup>六 <sup>かつ</sup>日、<sup>し</sup>イ <sup>かれ</sup>イス <sup>かれ</sup>ス <sup>かれ</sup> ヴ <sup>かれ</sup>ィ <sup>かれ</sup>フ <sup>かれ</sup>ァ <sup>かれ</sup>ニ <sup>かれ</sup>ヤ <sup>かれ</sup>に <sup>かれ</sup>來 <sup>かれ</sup>れ <sup>かれ</sup>り、 <sup>かれ</sup>即 <sup>かれ</sup>ラ <sup>かれ</sup>ザ <sup>かれ</sup>リ <sup>かれ</sup>曾 <sup>かれ</sup>て <sup>かれ</sup>死 <sup>かれ</sup>して <sup>かれ</sup>彼 <sup>かれ</sup>が

<sup>し</sup>死 <sup>ふっかつ</sup>より <sup>もの</sup>復 <sup>お</sup>活 <sup>ところ</sup>せ <sup>かしこ</sup>し <sup>おい</sup>め <sup>かれ</sup>し <sup>ため</sup>者 <sup>ばんさん</sup>の <sup>もう</sup>居 <sup>もう</sup>る <sup>もう</sup>所 <sup>もう</sup>な <sup>もう</sup>り。 <sup>もう</sup>彼 <sup>もう</sup>處 <sup>もう</sup>に <sup>もう</sup>於 <sup>もう</sup>て <sup>もう</sup>彼 <sup>もう</sup>の <sup>もう</sup>爲 <sup>もう</sup>に <sup>もう</sup>晩 <sup>もう</sup>餐 <sup>もう</sup>を <sup>もう</sup>設 <sup>もう</sup>け <sup>もう</sup>たり、 <sup>もう</sup>マル <sup>もう</sup>フ <sup>もう</sup>ァ

<sup>きょうじ</sup>供 <sup>かれ</sup>事 <sup>とも</sup>し、 <sup>せきざ</sup>ラ <sup>もの</sup>ザ <sup>ひとり</sup>リ <sup>ひとり</sup>は <sup>ひとり</sup>彼 <sup>ひとり</sup>と <sup>ひとり</sup>偕 <sup>ひとり</sup>に <sup>ひとり</sup>席 <sup>ひとり</sup>坐 <sup>ひとり</sup>せ <sup>ひとり</sup>し <sup>ひとり</sup>者 <sup>ひとり</sup>の <sup>ひとり</sup>一 <sup>ひとり</sup>たり。 <sup>じゅんりょう</sup>マリ <sup>じゅんりょう</sup>ヤ <sup>じゅんりょう</sup>は <sup>じゅんりょう</sup>純 <sup>じゅんりょう</sup>良 <sup>じゅんりょう</sup>なる <sup>じゅんりょう</sup>「 <sup>じゅんりょう</sup>ナル <sup>じゅんりょう</sup>ド <sup>じゅんりょう</sup>」 <sup>あたい</sup>の <sup>あたい</sup>價 <sup>あたい</sup>

とうと においあぶらいっきん と あし ぬ おのれ かみのけ もっ そのあし のご  
 貴き香膏一斤を執りて、イイススの足に膏り、己の髪を以て其足を拭えり、  
 いえ においあぶら かおり み そのもんと ひとり こ すなわち  
 家は香膏の香氣に満たされたり。其門徒の一、シモンの子イウダ「イスカリオト」、即  
 かれ う ものいわ なん こ においあぶら ぎんさんびやく う まづ もの ほどこ  
 彼を賣らんとする者曰く、何ぞ、此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さ  
 ざりし。彼の之を言いしは、貧しき者を慮る爲に非ず、即竊者たるに因りてなり。  
 かれ かねばこ も そのうち おさ もの たづさ い かれ お かれ わ  
 彼は金匣を持ち、其内に藏めたる者を携えたり。イイスス曰えり、彼を捨て、彼は我が  
 ほうむり ひ ため これ たくわ けだしまづ もの つね なんぢら とも われ つね なんぢら  
 葬の日の爲に此を貯えたり。蓋貧しき者は常に爾等と借にす、我は常に爾曹  
 とも おお たみ かれ かしこ あ し ひとり ため  
 と借にするにあらず、イウデヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知りて、獨イイススの爲の  
 みならず、すなわちそのし ふっかつ み ため きた しさいしよちよう  
 乃其死より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。司祭諸長はラザリを  
 ころ はか けだしかれ ゆえ よ おお じんゆ しん  
 も殺さんことを謀りたり、蓋彼の故に因りて、多くのイウデヤ人往きて、イイススを信ぜ  
 り。明日、節筵の爲に來りし衆くの民は、イイススのイエルサリムに來るを聞きて、櫻欄の  
 えだ と い かれ むか よ い しゅ な よ きた おう  
 枝を取り、出でて彼を迎え、呼びて曰えり、「オサンナ」、主の名に因りて來るイズライリの王  
 しゆくふく わかきうさぎうま え これ の しる ごと いわ  
 は祝福せらる。イイスス小驢を獲て、之に乘れり、録されしが如し、云く、シオン  
 むすめ おそ なか み なんぢ おう わかきうさぎうま の のぞ かれ もんと はじめこれ  
 の女よ、懼るる勿れ、視よ、爾の王は小驢に乗りて臨むと。彼の門徒は初此  
 さと しか えい のち こ こと かれ さ しる かつこれ かれ  
 を曉らざりき、然れどもイイススの榮せられし後、此の事の彼を指して録され、且此を彼  
 おこな おも おこ さき とも あ たみ かれ はか よ いたし  
 に行いしを憶い起せり。先にイイススと借に在りし民は、彼がラザリを墓より呼び出し  
 これ し ふっかつ こと しょう これ よ たみ かれ むか けだしかれ こ  
 て、之を死より復活せしめん事を證せり。此に縁りて民は彼を迎えたり、蓋彼が此の  
 きせき おこな き  
 奇蹟を行いしを聞けり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中  
 からよみがえらせたラザロのいた所である。イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕を  
 していた。イエスと一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっていた。その時、マリヤは高  
 価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、  
 香油のかおりが家にいっぱいになった。弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテの  
 ユダが言った、「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。彼がこ  
 う言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっ  
 ている、その中身をごまかしていたからであった。イエスは言われた、「この女のするままにさせておき  
 なさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。貧しい人たちはいつもあなたがた  
 と共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおら  
 れるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、

よみがえらせたラザロを見るためでもあった。そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と書いてあるとおりであった。弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸